
俺達の休日

東雲しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺達の休日

【Nコード】

N8911X

【作者名】

東雲しのぶ

【あらすじ】

2091年。

軍人を育成する為に建設された此处、王牙学園。

先日、サッカーを滅しようとして過去へ送られた十一人の少年達。

その選りすぐりの少年達の中でもズバ抜けて優秀だった三人ーエスカ・バメル、ミストレーネ・カルス、そしてバダップ・スリード。

未来に帰り、いつも通りの日常に戻った頃、ふとミストレが放った言葉。

その言葉を受け三人はある行動を起こす。

第一話 会話

(ミストレ side.)

「ねえねえ、二人とも」

ある日のこと

俺はふと思ったことを目の前にいる二人に語った。

「なんだ。」

唐突に話しかけた俺に銀髪に血の様に赤い目、褐色の肌、そして額に紋章を刻む少年「バダップ」スリードは視線をこちらに向けた。

この俺が唯一超えられない男。俺にとって求め、そして掴んでいた“一番”をすんなり、いとも簡単に奪っていった男。最初は憎く、苛立ちの対象でしかなかった。

隙があれば寝首をかいてやるとか、捻り潰したいと思い、憎悪にこの美しい顔を何度歪ませてきたことが。

だが決闘をし、鼻の骨を砕かれたとき、俺は思った。

嗚呼、俺は永久にこいつを抜くことは出来ない、と。

それからの俺とバダップは変わったと思う。昔のように俺はバダップにあった瞬間心の中で悪態をつくことなどをしなくなった。

そして俺の中で一番変わったことは、バダップの次なら二番でも構わないかな、と思い始めたことだ。

このことで一番驚いていたのは他でもない、自分だった。だって俺が俺以外で、しかも同学年で赤の他人を認めたのは初めてだったから。

バダップに影響されたのは俺だけではないだろう。

バダップの隣にいる三白眼にダークブルーの髪、バダップと同じ褐色の肌、そしてフェイスペイントをした男―エスカ―バメル通称エスカバ。

此奴も少なからずバダップに影響を受けた人間だ。

まあ、それはおいておくとしよう。

「またお前の親衛隊の話じゃないだろうな」
エスカバが心底嫌そうに顔を顰めた。

「違うよ。自分が男にしかモテないからって俺にあたらなくてくれる？」

「あたってねえし、男にモテるとかやめろ！！変な意味に聞こえるだろ！！！」

あ、バダップ珈琲飲んでる。

「そんな意味でいってないし。はあ…これだから童貞は…」

「どっ…！」

うわ、顔赤っ

ホント免疫ないなあ。

「…で、俺達に何のようだミストレ。」

早く話せと言いたげにバダップが呟いた。
てか珈琲置けよ。

「…ああ、唐突なんだけどさあ」

俺は狂気に顔を歪ませながら言った。

「死ぬならどんな死に方したい？」

第一話 会話（後書き）

はじめまして。

東雲しのぶです。

はじめてしまいました、連載小説。

内心ガクブルです。（――；）

さあ、この話と言いますと。

劇場版でもどシリアスだった王牙の3top。小説では少し語られました。が彼らの日常は謎です。

そんな彼らの謎な日常を捏造しちゃうぜ 的な内容になるはずで
す。はい。

と言うか、息抜きをさせてみようと思って書いています。

そんな感じでやって行きますんで、暖かい目でお付き合いいただければ幸いです。

東雲しのぶ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911x/>

俺達の休日

2011年11月16日16時00分発行